

登録コード	E5013900	開講年度	2026				
授業科目	インクルーシブ教育演習				担当教員	楠見 友輔 他	
英文授業名	Advanced Seminar of Inclusive Education				副担当		
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	火曜・3時限	対象学生	3年生以上
講義室	教育N104講義室		授業形態	講義	遠隔授業科目	備考	履修希望者が40名程度を超える場合は4年生の履修を優先し、残りの枠を抽選とする。
信大コンベンション	該当						
(1)授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素				⇔	【授業の達成目標】	
	26Eカリ, 25Eカリ, 24Eカリ, 23Eカリ, 22Eカリ, 21Eカリ, 20Eカリ						
	教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観				⇔	多様性を認める社会の意義を理解し、共生社会の担い手となる教師としての高い使命感と倫理観を形成する。	
	教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能				⇔	多様なニーズのある子どもの参加と学習のために、授業の省察と改善を不断に行うことのできる教師としての資質を獲得する。	
(2)授業で学べる「テーマ」	多文化協働						
(3)全学横断特別教育プログラム							
(4)授業の概要	インクルーシブ教育とは、様々な背景や特徴や願いを持っている多様な子どもが授業に参加し、授業の中で意義のある学びを得ることができるよう、通常教育のシステム、学級文化、教育内容や評価、人間関係、教え方等を改善していくことである。本講義では、これまでの教員養成課程の講義等を通して身につけた、①障害や特別なニーズのある子どもへの教育に関する知識、②各教科の目標、内容、指導法についての理解、③教育実習や他の教育実践に関わった経験、を組み合わせ、応用的で高い教育実践力を獲得することを目指す。また、インクルーシブ教育を牽引することができる教師としての高い使命感と倫理観を形成する。本講義で学ぶ内容は主に以下の3点である。 1) インクルーシブ教育の理念と国内外の動向についての知識 2) 通常学級で多様なニーズのある子どもの参加と学習を促す授業実践の方法 3) インクルーシブな授業実践を行うための使命感と倫理観						
(5)授業計画	第1回 ガイダンス：インクルーシブ教育の理念と基礎的な知識 第2回 【文献講読①】国内のインクルーシブ教育の状況 第3回 【文献講読②】国外のインクルーシブ教育の状況 第4回 【文献講読③】通常学級で様々な子どもが学ぶための工夫（基礎的環境整備） 第5回 【文献講読④】通常学級で様々な子どもが学ぶための工夫（教材） 第6回 【演習①】ビデオ視聴＋ディスカッション（算数） 第7回 【演習②】ビデオ視聴＋ディスカッション（国語） 第8回 【演習③】模擬授業計画① 第9回 【演習④】模擬授業① 第10回 【演習⑤】ビデオ視聴＋ディスカッション（授業の導入） 第11回 【演習⑥】模擬授業振り返り①ー1 第12回 【演習⑦】模擬授業振り返り①ー2 第13回 【演習⑧】模擬授業② 第14回 【演習⑨】模擬授業②（授業アンケートの実施） ※授業の順番や内容については、履修者の所属コースや人数によって変更する場合があります。 【文献講読】では4～5名ずつのグループを作る。グループで担当する文献のレジュメを準備し、発表を行う。各グループで合計2つの文献を担当する。 【演習】では3～6名ずつのグループを作る。グループは可能な限り同じ学校種や教科の基礎免を取得見込みの学生で組むようにする。グループで模擬授業の計画、実践を行う。 〈授業計画〉では、1. 障害種や子どもの特徴、2. 学校種段階、3. 教科の目標と内容、を設定して授業計画を作成する。 〈模擬授業〉では、計画した授業の冒頭（約15分）の模擬授業を行う。実践後に授業の解説と質疑応答を行う。実践の様子をビデオカメラで記録する。 〈振り返り〉では、模擬授業のビデオ記録を見ながら振り返りを行い、実践の良い点を共有し、改善点を議論する。 ①を担当するグループは、限局性学習症、注意欠如／多動症、自閉スペクトラム症のうち、1つを選択する。 ②を担当するグループは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱のうち、1つを選択する。 ③を担当するグループは、知的障害とする。						
(6)成績評価の方法	文献講読のレジュメ＋演習の授業計画、模擬授業、振り返り＋最終レポートで評価する。 ・得点率による評価基準は次のとおりとする。 90%以上 秀, 89-80% 優, 79-70% 良, 69-60% 可, 59%以下 不可。						
(7)成績評価の基準	文献講読のレジュメの評価基準は次のとおりである。 (i) 文献の内容が適切に整理されている（0～10点） (ii) 文献の内容に対する適切なコメントが含まれている（0～10点） 演習の評価基準は次のとおりである。 (i) 計画に積極的に関与している（0～10点） (ii) 模擬授業に積極的に関与している（0～10点）						

(7)成績評価の基準	(iii) 振り返りに積極的に関与している (0~10点) 最終レポートの評価基準は次の通りである。 (i) 問題の設定が適切である (0~10点) (ii) 問題の背景を説明できている (0~10点) (iii) その問題にどのような課題があるのかを指摘できている (0~10点) (iv) 指摘した課題について社会的・学術的な知識を用いて考察できている (0~10点) (v) 自分の意見を説得的に提示できている (0~10点)
(8)事前事後学習の内容	授業時間90分に加えて、授業前後の、文献講読のレジュメ作成、模擬授業の計画・実践の準備60時間の学習時間を目安とする。
(9)履修上の注意	障害や特別支援教育に関する基礎的な知識は本講義内で扱わないので、他の講義や独学で学習した上で履修をすること。
(10)質問、相談への対応及び連絡先	授業内容に関する質問や相談については、授業の前後で直接相談をするか、楠見（kusumi@shinshu-u.ac.jp）までメールで連絡をして下さい。
【教科書】	青山新吾・岩瀬直樹（2019）『インクルーシブ教育を通常学級で実践するってどういうこと？』（学事出版） ※事前に購入する必要はない。
【参考文献】	楠見友輔（2022）『子どもの学習を問い直す：社会文化的アプローチによる知的障害特別支援学校の授業研究』（東京大学出版会） ※事前に購入する必要はない。